

『ハルカせんせいと絵本の中の王子』

著：高将にぐん

ill：御山ひわ

「……………」

一人暮らしのアパートに帰ると、晴夏はコタツに絵本を置いて、静かに画用紙のページをめくった。今よりずっと下手くそな絵で綴られている陳腐な童話。これは、晴夏が大学生の時に、学校の課題として描いた絵本だ。

その頃まだ小学校に上がる前だった茉莉はこれが大のお気に入り、読んでくれ読んでくれと、何度もせがまれたものだった。そうしてついにはどうしても欲しいと駄々をこねられ、可愛い姪の懇願に折れた晴夏は、課題として提出する物は新たに作り直すことにして、制作途中であったこの絵本を、ちっちゃな茉莉にプレゼントしたのだ。

「……王子、なのか？」

クレヨンとポスターカラーで描かれているのは、赤いマントにかぼちゃパンツ、白いタイトの王子様。目に鮮やかな黄色い髪の上に、小さな王冠を戴いている。

どきん、どきん、心臓が晴夏自身よりずっとおしゃべりに跳ねている。

そんな訳ない。いくらなんでも、有り得ない。

ここに描かれている王子と、あの長身の男とが、同一人物——だなんて。でも。

「やっと思い出してくれたかい？」

その声に戻れば、王子が海の色目の目を細め、晴夏をじっと見下ろしていた。古びたアパートの和室とおとぎの国の王子とのコントラストが、非日常感を露骨に浮き彫りにする。

「お前……！」

「君が作った。君から生まれた。僕はずっと、君に会いたかった」

言葉を失くして見つめる晴夏に、王子はふっといつものやわらかい笑みを返すと、ふんわり優雅にマントをなびかせ、晴夏の傍らに膝をついた。そうしてお姫様にするように、優しく晴夏の手を両手で取って包み込んだ。

「そうして逢えた。僕の、君に」

こくりと息を呑んでみても、貼り付く喉は潤わない。

晴夏は乾いた声をひり出すと、掠れた質問を投げかけた。

「お前、どうして……何をしに、俺に？」

『おうじさまは おうさまと やくそくしました。せんにちのあいだに かならず おきさきさまとなる うんめいのあいてを みつけてくると』

「……………」

「君の書いた物語だ」

けれど目の前の王子は確かに実在していて、さらさらとした金髪も、なめらかな白い肌も、とても自分が描いたイラストから飛び出したとは思えなかった。心臓の音がやかましく耳の中まで響いてくる。冬だというのに汗が背中を伝い落ちる。

「僕は君のシナリオ通り、運命の相手を探し続けた。君が書いた恐ろしい魔の森も、陰しい霧の谷も越え、十の国を巡り、百の村を訪ね、千日の旅を続けた。けれど」

王子はそこで目を伏せると、そっと晴夏の指先に口付けた。そのやわらかさに思わずびくんと肩が竦む。王子の形のいい唇から、ふっ、と微かに笑みが漏れる。「駄目だった。どんなに美しい人に会っても、どんなに優しい人に会っても、どうしても僕の心にはハルカ、いつも、いつでも君だけがいた。だから来たんだ。君に会うために」

優しい眼差しに射貫かれて、どきん、と左胸が悲鳴を上げる。

「おや、これは」

ふと王子が、花瓶に生けられた薔薇を見て、大きな青い目を眩しそうに細めた。

「気に入ってもらえたなら良かった。君に見せたいと、ずっと思っていたから」

「え？」

思わず晴夏が尋ねると、王子はにっこり頷いた。

「君の描いた花が——君の描いた世界がどれほどまでに美しいか。ずっと、君に伝えたかった」

ハルカに会えますように。

ハルカが笑ってくれますように。

真っ直ぐに注がれる想いは遮るものなく晴夏の左胸を刺し、呼吸をするのも苦しくさせた。

「な、んで、」

「『願いはきっと叶う』。君の描いた物語のテーマだ」

王子がきゅっと、晴夏の手を握り締める。絵本から飛び出してきた主人公。けれども確かにそこには、晴夏の手を包むあたかな温度が、なめらかな肌が、自分を捕えて離そうとしない大きな手のひらが存在していた。

「ねえ、ハルカ。ハルカは、神様ってどんな人だと思う？」

『神様』、という言葉にぴくりと晴夏の眉が上がる。表情をこわばらせる晴夏の顔を、王子がじっと覗き込む。

「神……様……？」

「なんとなくのイメージでいいから。聞かせて？」

王子の、宝石よりも澄んだ瞳に見据えられ、晴夏はぐっと奥歯を噛んだ。それから苦々しげに、ようやく言葉を絞り出した。

「……っ、神様なんかいないだろ。そんなの……」

「でもね、僕には創造主がいたんだ」

王子は口元に笑みを浮かべてはいるものの、鋭く目を細め、どこか遠くを一点に見据えた。

「僕の世界の全てを生み出し、僕らを遥かに超越した高次元の貴き存在。彼に逆らうことなど有り得ず、ただ、崇(あが)めることしか許されない、絶対的な——」

そこまで言って王子はけれども言葉を区切り、晴夏の手をぎゅっと握り締めた。そうして白い歯を見せて、いたずらっぽくすりど肩を竦めた。

「けれどね、僕らの神様ときたら、間の抜けた男の子だった！」

ぽかんとする晴夏に向かって、王子はにこにここと目を細めて言葉を続けた。

「世界を構築している最中も色塗りはすぐに失敗するし、いい加減でがさつだし、古くなったヨーグルトでお腹は壊すし、すぐに怒るしすぐに笑うし、いつも寝癖はついてるし」

「おい待てよ、それって、」

「僕にはね、ハルカ。全能なんかじゃない父なる神が、たまらなく身近な存在で、たまらなく可愛い人に映ったんだ。なんでも出来るはずなのに、なんでもこなせる訳じゃない。けれど、自分の夢にひたむきで、努力を惜しむことの無いハルカ。それだけで僕は充分君に惹かれてしまったのだけれど、」

王子はぱっと頬を染めると、子供みたいにはにかんだ。

『僕』を描いている時のハルカには、本当に参った。『リズム感のある文言』や『鮮やかで豊かな色彩』、『テーマの具象化』——他の皆が、上手いこと課題をこなそうとしている中、ハルカだけはこう言ってたね。『これを読んで聞かせた子供達が、楽しんでくれるといいな』って。『作ってる俺自身、こんなに楽しんで描いてるんだもんな』って。『それに何より、この王子をしあわせに出来るのは俺だけだもんな』って」

覚えている、忘れる訳が無い。大学時代、一番楽しかったあの頃。

望めば叶うと思っていた。足を踏み出せば前に進めると、瞳を開ければ世界が見えると、そう。

疑うことなんて、まだ、無くて。

「僕は誇らしかった。同じく生まれたどの絵本の仲間より、僕は僕を誇りに思っていた。君から生まれたこと、君に愛されたこと。そうして僕は決めたんだ」

王子の大きな手のひらが、晴夏の無骨な手をぎゅっと力強く握り締める。

「君が僕をしあわせにしてくれるなら、君をしあわせにするのは僕だ、って」

真っ直ぐそう言われてしまうと滅茶苦茶に恥ずかしくて、晴夏は逃げるように目を逸らした。そんな晴夏に、王子がくすりと笑みをこぼす。

「結局、僕の物語は未完だったけれど、一番の読者である茉莉ちゃんに喜んでもらえて、僕はとてもしあわせだった。そして、そんな優しい君が、僕はますます大好きになった」

王子のしなやかな手が、晴夏の頬を滑るように包む。晴夏は肩を強張らせると、何も言えずに王子の瞳を見つめ返した。

「……ハルカ」

綺麗な、綺麗な青い瞳。

(そりゃそうだ、俺が塗ってやったんだから)

夢の中へ吸い込まれそうな、透き通った深い青。

「僕のハルカ」

王子の端正な顔が近付く。金の睫毛が伏せられる。王子のあたたかな吐息が、晴夏の鼻先を微かにくすぐる。とくん、と心臓が警告をしたけれど、動くことなど出来なくて。そして。

「ッ……！」

晴夏がぎゅっと唇を結び、固く目を閉じた瞬間。

やわらかい唇が、一瞬だけ、おでこにちゅっと重ねられた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>